

トドキ遺跡

筑紫野市大字古賀所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 34 集

1993

筑紫野市教育委員会

トドキ遺跡

筑紫野市文化財調査報告書 第34集

筑紫野市教育委員会

トドキ遺跡

筑紫野市大字古賀所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 34 集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-41

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	3
II 位置と環境	3
III 調査の内容	
概要	5
土壌 (SK)	5
溝状遺構 (SD)	5
性格不明遺構 (SX)	5
出土土器	5
IV まとめ	9

挿図目次

	頁
Fig. 1 調査地点周辺遺跡分布地図 (S=1/25,000)	1
Fig. 2 調査地点周辺地形図 (S=1/2,500)	2
Fig. 3 遺構配置図 (S=1/80)	4
Fig. 4 遺構実測図 (S=1/40)	6
Fig. 5 P-20, 53, 66, SK-3・5 出土土器実測図 (S=1/3)	7
Fig. 6 SD-2 出土土器実測図 (S=1/3)	7
Fig. 7 SD-2 出土土器実測図 (S=1/4)	8
Fig. 8 出土鉄器・石器・土製品実測図 (S=1/4, 1/2)	9
Fig. 9 銅銭拓影 (S=1/1)	9

図版目次

PL. 1 調査区遠景 (南から)	PL. 6 P-53, SK-3・5
PL. 2 調査区近景 (南東から)	SD-2 出土土器
PL. 3 調査区全景	PL. 7 SD-2 出土土器
PL. 4 SK-1・2・4・5	PL. 8 出土鉄器・石器・土
PL. 5 SD-2, SX-1	製品・銅銭
SD-2 遺物出土状況	

序

筑紫野市は福岡市と久留米市を結ぶルートのはぼ中間に位置するという地の利のため、経済・交通・流通の要所として発展してきておりますが、古代でも同じような状況であったと聞いております。博多湾沿岸の鴻臚館より大宰府を経て九州各地へ向かう官道が市内を通っていたことを裏づける発見もありました。江戸時代においても長崎街道・博多街道が市内を通り、また筑前六宿に数えられていた山家宿・原田宿もありました。市北部は推定大宰府条坊の一部を擁し、この大宰府条坊での今日までの発掘調査の結果、青銅器や陶磁器が出土しております。また塔原廃寺や杉塚廃寺など古来からの諸寺院跡が点在しております。このように歴史に育まれ、伝統に培われた筑紫野市において後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護することは当然の責務であります。

今回の発掘調査の結果、古墳時代から中世までの遺構が出てきたと聞いております。この発掘調査が遂行できましたのも申請者はじめ地元の皆様のご指導、ご協力の賜物と存じ、衷心よりお礼を申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

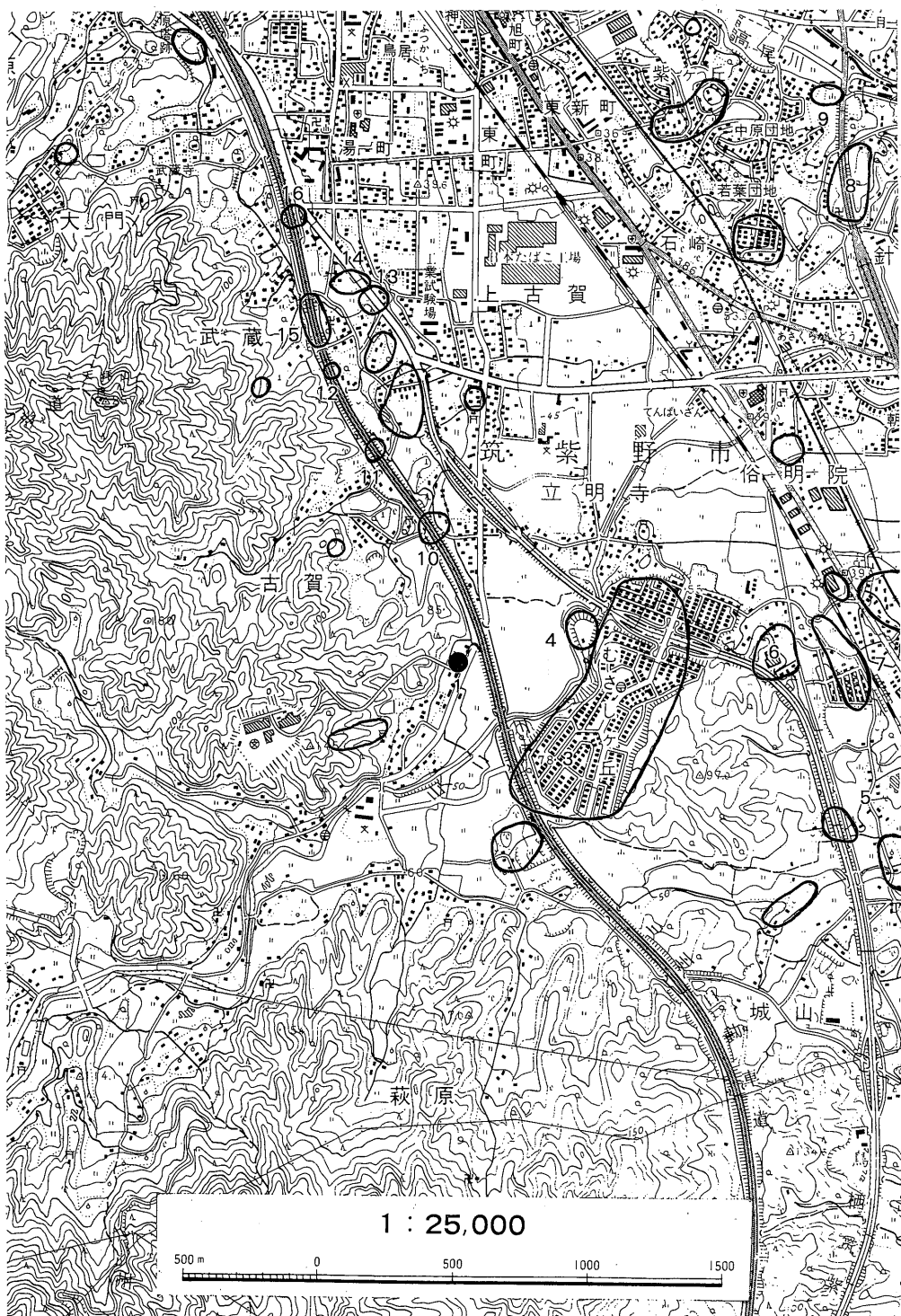
平成 5 年 3 月 31 日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 洵 正敏

例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野市大字古賀423-1 外に所在する遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 現地での発掘に係る遺構実測・写真撮影は奥村俊久・仁田坂聡のほか、有限会社空中写真企画に委託して撮影した。
3. 出土土器の実測は仁田坂が行い、石器については渡邊和子が行った。
4. 出土遺物の写真撮影は、フォトハウス岡に委託して撮影した。
5. 製図は仁田坂が行った。
6. 挿図中、遺構図の北は真北を示す。
7. 遺構の略号は土壌を SK、溝状遺構を SD、ピットを P とした。
8. 本書の執筆はⅠを奥村が、Ⅱ～Ⅳを仁田坂が担当し、仁田坂が編集した。



- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 1 トドキ遺跡 | 2 萩原古墳群 | 3 立明寺古墳群 | 4 ヨロイ田遺跡 |
| 5 大牟田古墳群 | 6 大牟田西遺跡 | 7 大牟田東遺跡 | 8 野黒坂遺跡 |
| 9 大曲り遺跡 | 10 扇祇古墳群 | 11 山の口遺跡 | 12 畑添遺跡 |
| 13 原口古墳 | 14 原口遺跡 | 15 八隈古墳群 | 16 道場山遺跡 |
- 数字のない○印は散布地

Fig. 1 調査地点周辺遺跡分布地図 (S = 1 / 25,000)

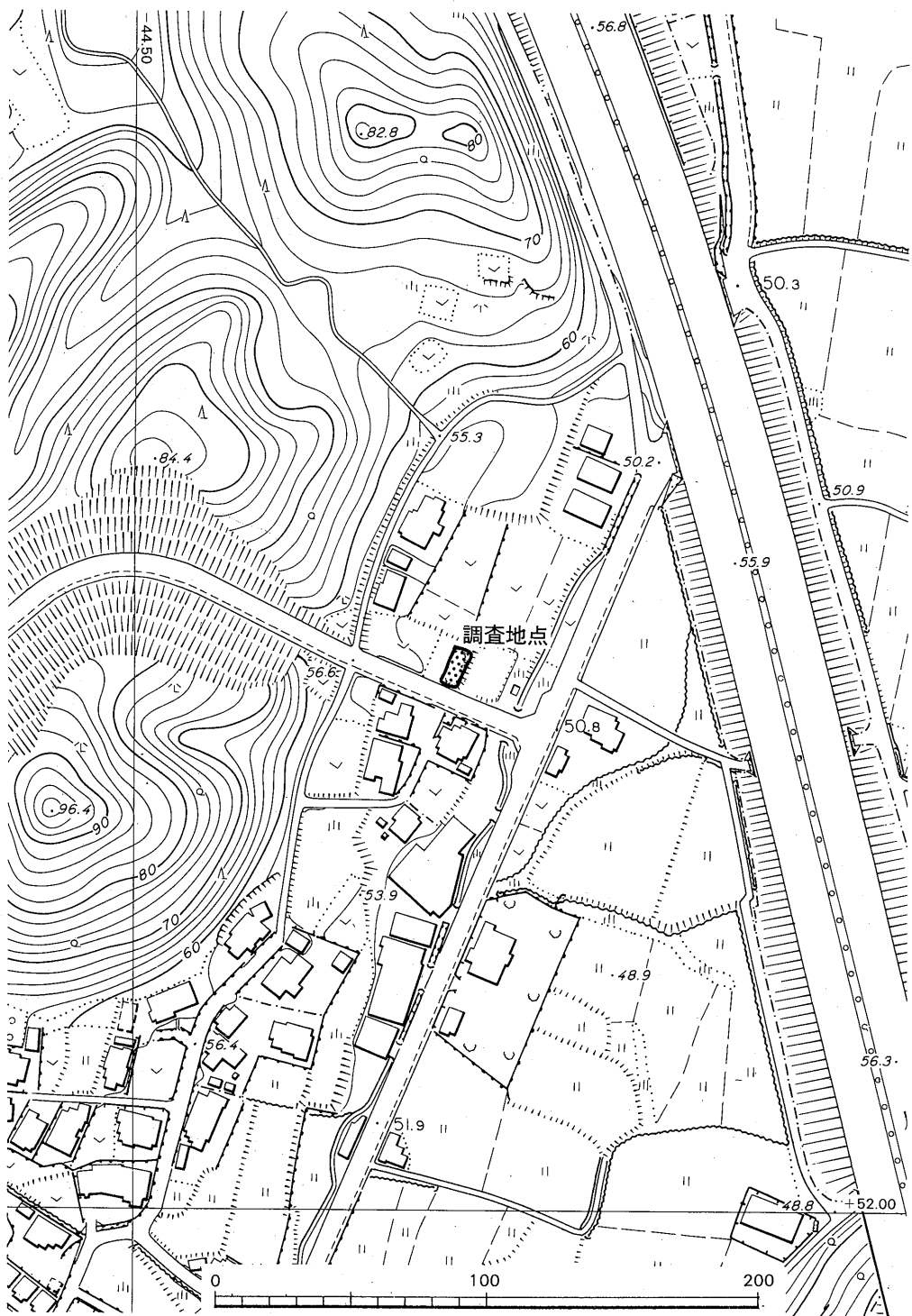


Fig. 2 調査地点周辺地形図 (S=1/2,500)

I 調査に至る経過

平成3年12月16日付けで、申請者から自己専用住宅建築に伴い文化財所在の有無について照会があり、市教育委員会では平成4年1月12日に試掘調査を実施した。この結果、埋蔵文化財が確認され、市教委は平成4年1月21日付で遺跡発見の通知を行い、平成4年2月20日に県教育委員会からの遺跡の発見についての通知を受領した。これに基づき、申請者から平成4年2月21日付で埋蔵文化財発掘の届出が提出され、ただちに進達した。3月24日には周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、事前に発掘調査を実施する旨の県教育委員会よりの通知を申請者に伝達するとともに、発掘調査の実施について協議をおこない、市が発掘調査を実施することとし、平成4年4月30日付けで埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

調査組織	総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
	庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課 課長	竹田征治
			社会教育課 文化財担当 係長	山野洋一
			主事	奥村俊久（試掘）
調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課 文化財担当 主事	奥村俊久	
			嘱託	仁田坂聡

II 位置と環境

トドキ遺跡は背脊山塊の東端、基山山麓の山口川が形成する山合いの狭長な扇状地の左岸に位置する。扇状地の右岸には縄文時代遺物の散布地として知られる萩原遺跡がある。

本遺跡は天拝山を仰ぎ見る位置にある。この周辺の中世から戦国時代末期にかけての歴史的環境を概観すれば、天拝山山頂には筑紫野市・那珂川町・佐賀県東部を根拠地とした筑紫氏の出城、天判山城が存在し、この城の周りにも和久堂城・博多見城・堂の山砦・飯盛砦が築かれ一大要塞として機能していた。筑紫氏は平野部をはさんで岩尾城や宝満城の高橋氏と対抗していた。その後、九州制覇のため北上を開始した島津義久に高橋氏とともに抵抗したが、あえなく落城した。ここトドキ遺跡は、博多見城と飯盛砦を結ぶ位置にあるため、島津勢の巧略の戦下の影響もあったものと考えられる。

参考文献 「筑前国續風土記」 貝原益軒

「飯盛古城跡」 飯盛古城跡保存会 1990

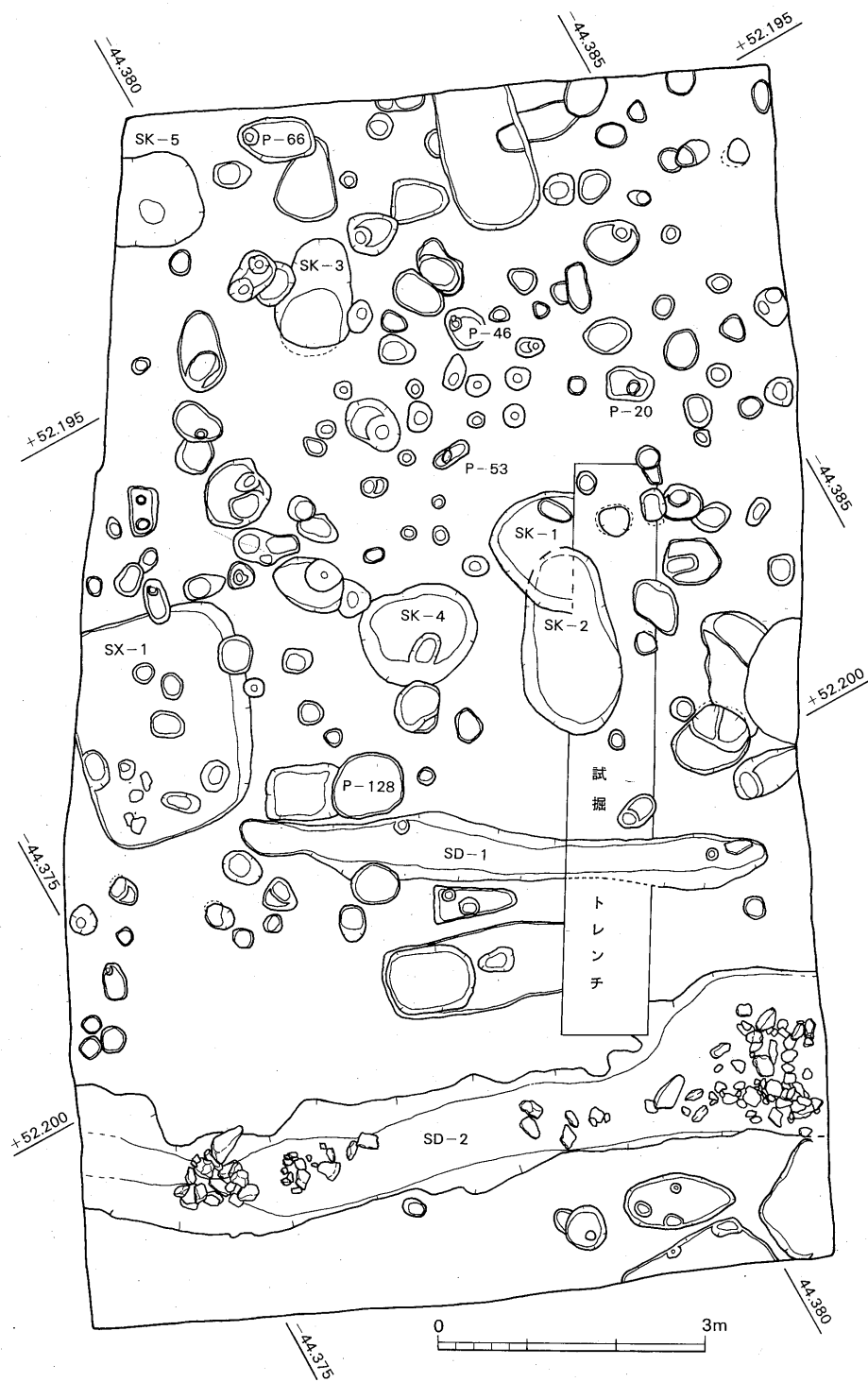


Fig. 3 遺構配置図 (S=1/80)

Ⅲ 調査の内容

概要

開発予定地の約200㎡の内、実質面積は約105㎡の発掘調査を実施した。調査区は以前畑であったことと、現地表から遺構面まで土砂がかなり堆積していたため攪乱をまったく受けてなかった。そのようななかで調査による主な検出遺構は土壌（SK）5基、溝状遺構（SD）2条、性格不明遺構（SX）1基であった。またピットは137を数えたが小片ながら遺物を含んだピットは128であった。

土壌（SK）（Fig. 4, PL. 4）

SK-1はN-77°-Wに主軸方位をとる。北側を試掘トレンチで切られているが、平面プランは楕円形に近い不整形と考えられる。

SK-2はN-25°-Eに主軸方位をとる。遺構西側上面10 cm程度をSK-1に切られる。平面プランは方形に近い。壁はほぼ直立する。

SK-3はN-30°-Eに主軸方位をとる。平面プランは方形となる。出土遺物により6世紀にあたる。

SK-4はN-46°-Wに主軸方位をとる。壁はほとんど直立し、床面はフラットである。一部深くなるが、周りの状況からして柱穴とは考えにくい。

SK-5は遺構南側が調査区外にのびる。出土遺物より6世紀とされるが、SK-3も6世紀の遺構であることから何らかの関連が考えられる。

溝状遺構（SD）（Fig. 4, PL. 5）

SD-1はN-60°-Wに主軸方位をとる。遺物が出土しなかったため遺構の性格や時期を確定できない。

SD-2はN-74°-Wに主軸方位をとる。途中西側に若干ふるがそのあたりで30cmほど底がほぼ直立して下がる。全体的に床面はフラットである。石溜りが2ヶ所あるが人為的ではなく流れ込んだと考えられ、土層観察でも一度に埋められていた。出土遺物は弥生中期の大形甕の口縁部もあるが床面より16世紀の土鍋が出土しているので、SD-2の時期は16世紀と考えておきたい。

性格不明遺構（SX）（PL. 5）

SX-1はN-80°-Wに主軸方位をとるが、一部調査区外にのびている。現況では2.2×1.4mであるが、壁は残りが悪く深いところでも4 cmにすぎない。

出土土器（Fig. 5～7, PL. 6・7）

1はP-66、2はP-20、3はP-53出土の土師皿である。2は体部が一度内弯して口縁に立ち上がる。3点とも摩滅が著しく、調整は不明瞭である。4はSK-5出土の形態的には須

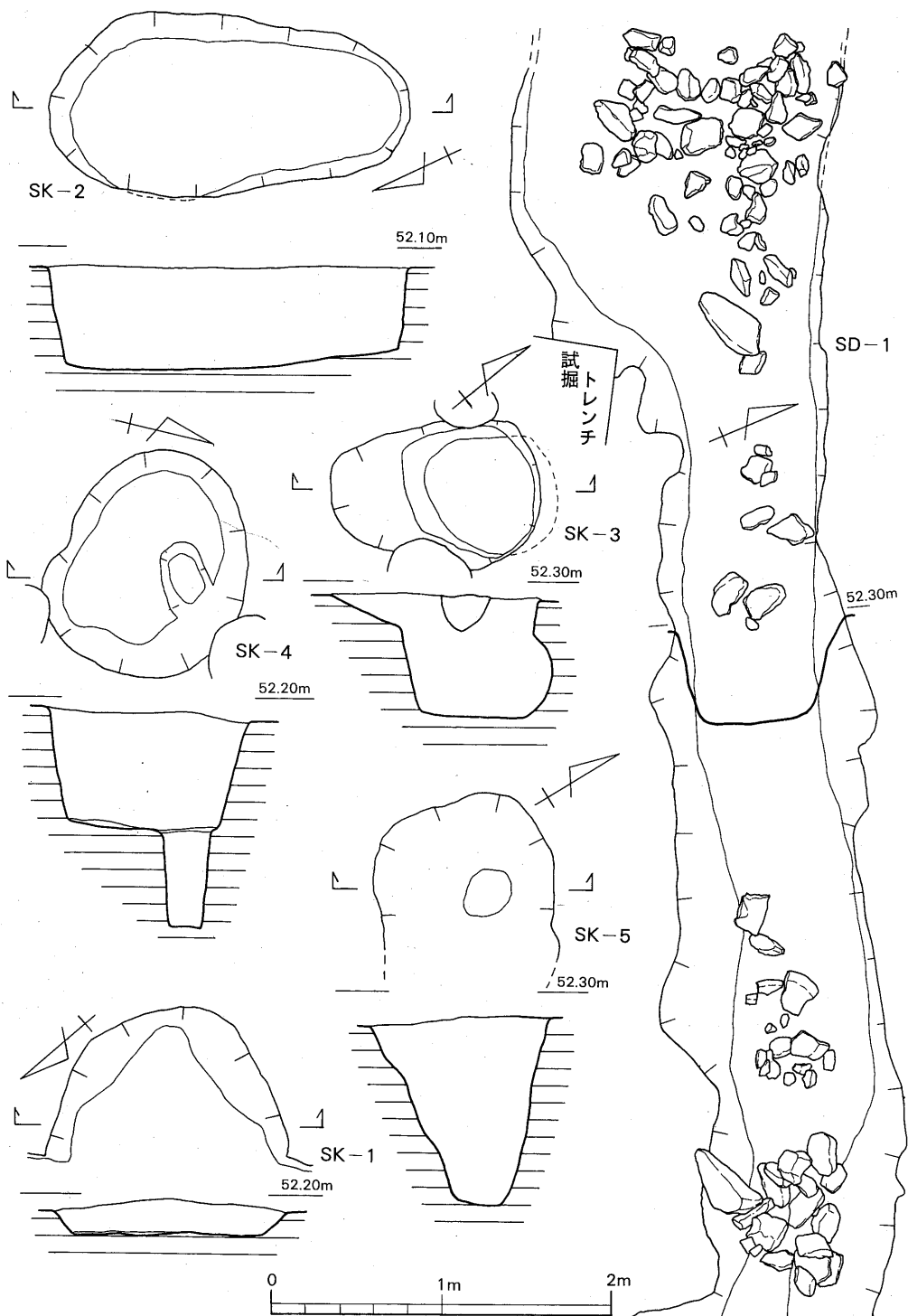


Fig. 4 遺構実測図 (S=1/40)

恵器坏蓋であるが、赤褐色の軟質土器である。胎土は精製されたもので須恵器と比べてほとんど砂を含んでいない。調整も丁寧になされている。5～7はSK-3出土である。5は須恵器坏蓋で器高4.6cm、口径13cmを測る。色調は青黒色で胎土も精製されたものが使用されており、ほとんど砂を含まないが、調整は雑である。8～27はSD-2出土である。12は軟質土器だが一部のみの出土である。外面は丁寧にナデられている。15は器高2.9cm・口径12.8cm、16は器高3.3cm・口径13.8cmを測る坏である。比較的小さい径の底部から直線的に大きく開く形態である。17は青磁碗である。激しいローリングを受けているため器面剥離が著しい。19は白磁碗である。見込に砂目が2ヶ所残る。20～25は土師質の擂鉢である。5点とも外面はナデたあとがあり、24はさらに斜め方向に刷毛目を入れているが、摩耗のため不明瞭である。そして5本1組の擂目を入れている。20は注口をもつ。5点とも使用された痕跡はない。26・27は土鍋である。26はほぼ完形だが底部がところどころかなり薄くなっており、また2点とも外面にかなりの煤が附着している。

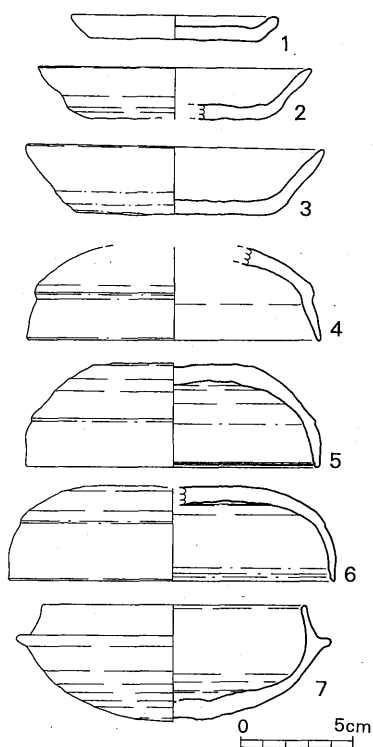


Fig. 5 出土土器実測図 (S=1/3)

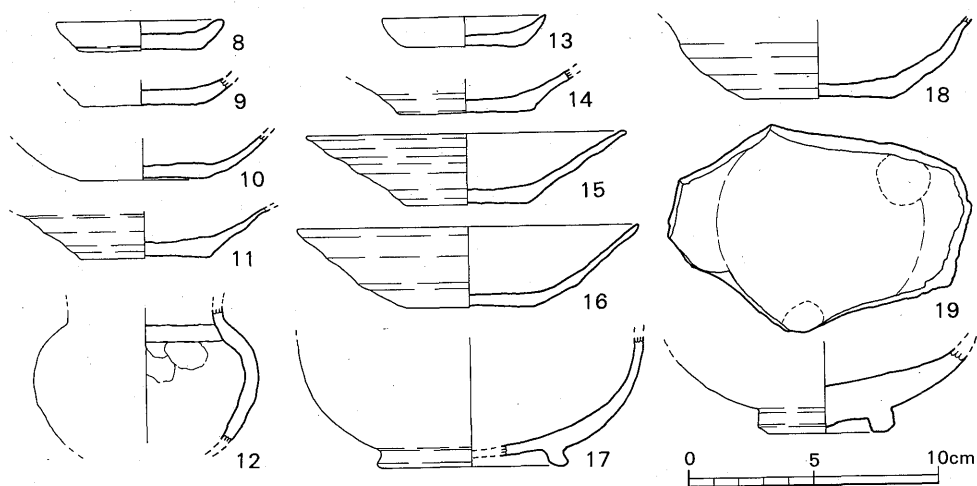


Fig. 6 SD-2 出土土器実測図 (S=1/3)

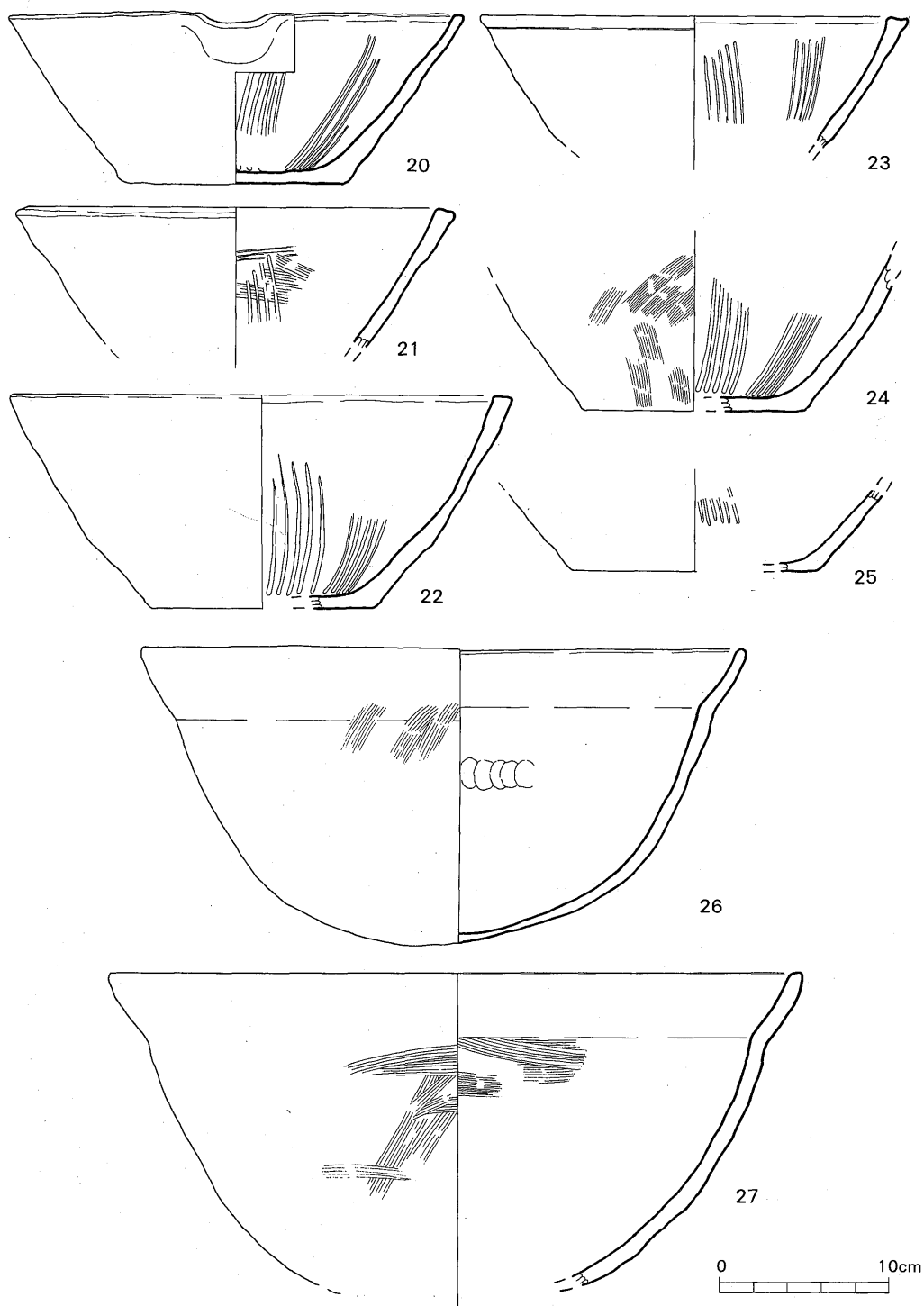


Fig. 7 SD-2 出土土器実測図 (S=1/4)

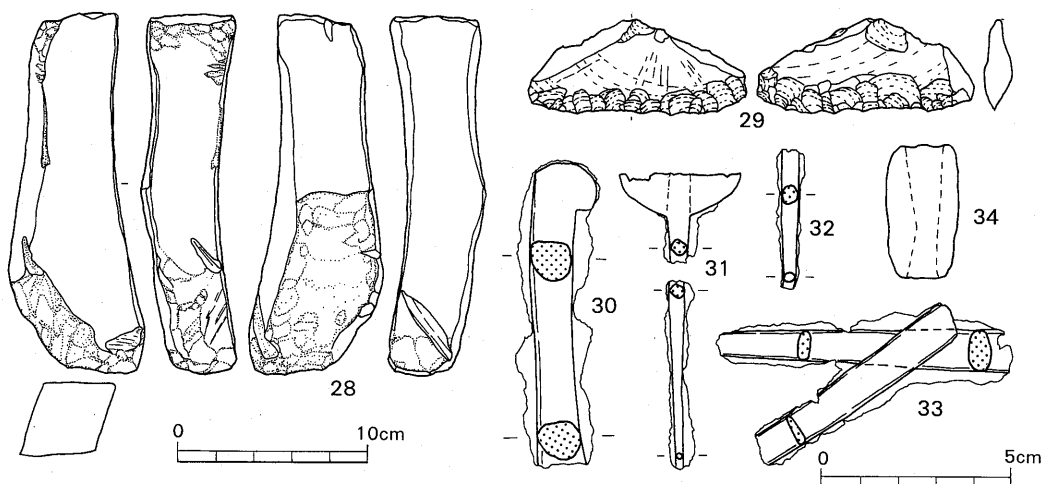


Fig. 8 出土鉄器・石器・土製品実測図 (S=1/4・1/2)

出土鉄器・石器・土製品・銅銭 (Fig.8～9, PL.8・9)

28はP-46出土の細粒砂岩製の砥石で砥面は4面、断面は四角形を呈す。29はサヌカイト製のスクレイパーである。表面の右側辺部は調査時に欠損。素材の剥片は横幅のあるものが使用されている。刃部は両面より連続的に調整されている。30・32は鉄釘である。31はSD-2出土の鉄製品である。受け皿に見える皿を鉄針が貫いている。33はSD-1出土の刀子だが2本が錆化でくっついていて。34は土錘である。P-128のほぼ床面より銅銭が出土した。北宋銭で初鑄が寶元2年(1038)の「皇宋通寶」であった。

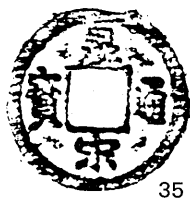


Fig. 9 銅銭拓影(S=1/1)

IV ま と め

発掘調査の結果、土壇5基、溝状遺構2条を検出した。時期としては断絶時期もあるが、中世より6世紀まで下がる。また弥生中期の土器が出土していることから本遺跡を含む周辺部は弥生時代までさかのぼる可能性をも含んでいる。本遺跡の主な構成年代である16世紀は戦国末期であり前述のごとく島津氏と筑紫氏で合戦が行なわれた。また調査でも炭化した木片や焼けた石等が検出されているが16世紀以降は人が活動したあとはなく、炭化した木片や、焼けた石は合戦の時と関連があるのか興味のあるところである。

周辺地域での発掘調査は本遺跡が最初であり、今後さらに周辺地域での発掘調査が進めば今回の成果も含めて、トドキ遺跡の性格が明らかになるだろう。

出土土器計測表

挿図番号	遺 構	器形／特記	胎 土	色 調	器高	口縁	底部径(cm)
Fig.5-1	P-66	土師器 糸切皿底	粗砂粒を少量と細砂粒を多量に含む	薄黄褐色	1.1	9.2	7.4
Fig.5-2	P-20	土師器 糸切皿底	細砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色	2.3	12.1	7.7
Fig.5-3	P-53	土師器 坏	多量の細砂粒と雲母を含む	明黄褐色	3.0	14.2	8.8
Fig.5-4	SK-5	似非須恵器 坏蓋	精製された胎土	内) 灰白色 外) 黄橙色		7.0	
Fig.5-5	SK-3	須恵器 坏蓋	粗砂粒を含むが精製された胎土	青黒色	4.6	13.0	
Fig.5-6	SK-3	須恵器 坏蓋	粗砂粒をわずかに含む	緑灰色	4.2	14.6	
Fig.5-7	SK-3	須恵器 坏	細砂粒をわずかに含む	青灰色	4.9	12.8	
Fig.6-8	SD-2	土師器 糸切皿底	細砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色	1.2	6.8	5.0
Fig.6-9	SD-2	土師質 坏	粗砂粒・細砂粒をわずかに含む	灰白色			5.0
Fig.6-10	SD-2	土師質 坏	細砂粒・雲母を含む	薄黄褐色			5.1
Fig.6-11	SD-2	土師質 糸切坏底	細砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色			5.4
Fig.6-12	SD-2	土師質	粗砂粒をわずかに含む	内) にぶい黄褐色 外) 白灰色			
Fig.6-13	SD-2	土師器 糸切皿底	細砂粒を多量に含む	薄黄褐色	1.3	6.5	4.6
Fig.6-14	SD-2	土師器 糸切坏底	粗砂粒を多量に含む	にぶい黄褐色			5.5
Fig.6-15	SD-2	土師器 糸切坏底	細砂粒・雲母を含む	内) 薄黄褐色 外) 灰褐色	2.9	12.8	5.0
Fig.6-16	SD-2	土師器 糸切坏底	細砂粒を含む	内) 黄褐色 外) にぶい黄色	3.3	13.8	5.2
Fig.6-17	SD-2	青磁 碗		オリーブ色			7.2
Fig.6-18	SD-2	土師質 碗	細砂粒を含む	にぶい黄褐色			5.8
Fig.6-19	SD-2	白磁 碗		乳白色			5.5
Fig.7-20	SD-2	土師質 播鉢	粗砂粒を含むが堅緻	にぶい黄褐色	10.0	26.9	13.2
Fig.7-21	SD-2	土師質 播鉢	細砂粒を含む	にぶい橙色		25.6	
Fig.7-22	SD-2	土師質 播鉢	粗砂粒をわずかに含む	明黄褐色	12.6	23.6	7.0
Fig.7-23	SD-2	土師質 播鉢	粗砂粒をわずかに含む	内) 薄黄褐色 外) 黄褐色		25.0	
Fig.7-24	SD-2	土師質 播鉢	細砂粒をわずかに含む	明黄褐色			7.0
Fig.7-25	SD-2	土師質 播鉢	細砂粒をわずかに含む	褐灰色			14.4
Fig.7-26	SD-2	土師質 土鍋	粗砂粒を含む	内) 明褐灰色 外) にぶい橙色	17.3	35.9	
Fig.7-27	SD-2	土師質 土鍋	粗砂粒を多量に含む	内) にぶい黄褐色 外) 褐灰色		40.8	
	SD-2	土師質 土鍋 外面に煤附	粗砂粒・細砂粒を含む	内) 薄黄褐色 外) 黒褐色		25.0	
	SD-2	土師質 播鉢	粗砂粒を多く含む	内) にぶい黄褐色 外) 灰黄褐色			
	SD-2	須恵器 坏蓋	細砂粒をわずかに含む	青灰色	4.9	12.8	

出土石器計測表

遺物番号	遺 構	石 材	器 種	長 さ	幅	厚さ(cm)
Fig.8-28	P-46	細粒砂岩	砥石	18.9	5.1	3.9
Fig.8-29	P-106	サヌカイト	スクレイパー	5.7	2.5	0.7
	P-44	中粒砂岩	砥石	9.9	2.9	1.9
	SD-2	凝灰岩	五輪塔(?)	11.7	9.0	5.2

出土鉄器計測表

遺物番号	遺 構	器 種	長 さ	幅	厚さ(cm)
Fig.8-30	P-129	鉄釘	8.0	1.9	1.1
Fig.8-31	SD-2	(鉄釘部分)長さ 7.9×厚さ0.5 (受け皿部分)径3.3			
Fig.8-32	SD-2	鉄釘	3.7	0.5	
Fig.8-33	SD-2	刀子	7.8	1.1	0.6
			6.3	1.0	0.3

出土土製品計測表

遺物番号	遺 構	器 種	胎 土	色 調	計 測 値 (cm)
Fig.8-34	P-32	土錘	細砂粒をわずかに含む	明黄褐色	長さ3.6×径2.0



PL. 1 調査区遠景（南から）



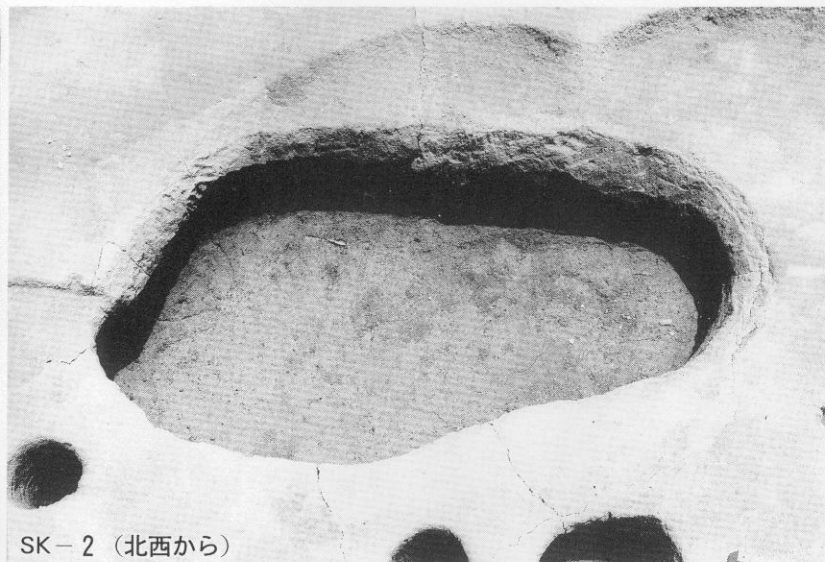
PL. 2 調査区近景（南東から）



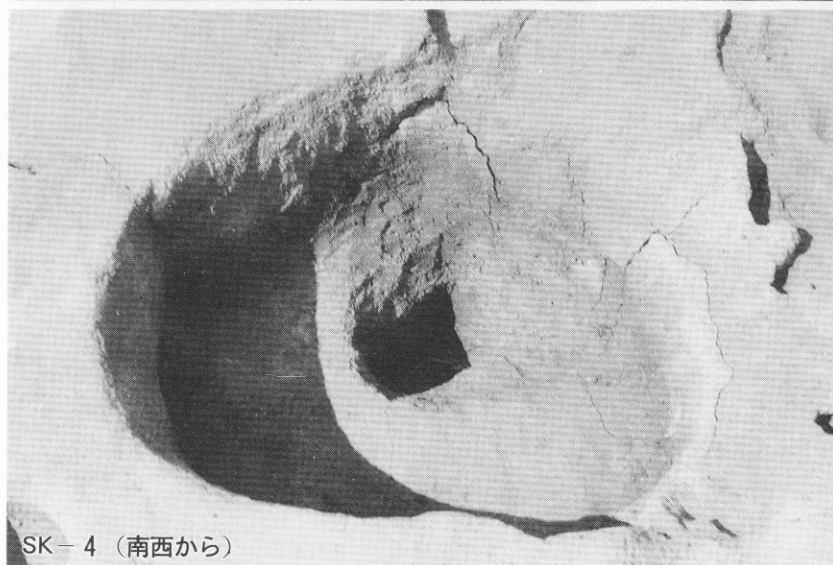
PL. 3 調査区全景



SK-1 (北西から)



SK-2 (北西から)



SK-4 (南西から)



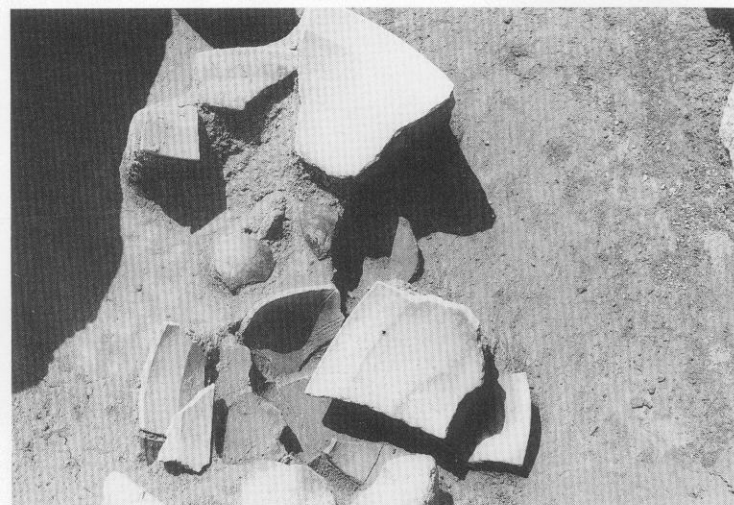
SK-5 (南東から)



SD-2 (上空から)



SX-1 (南東から)



SD-2 遺物出土状況

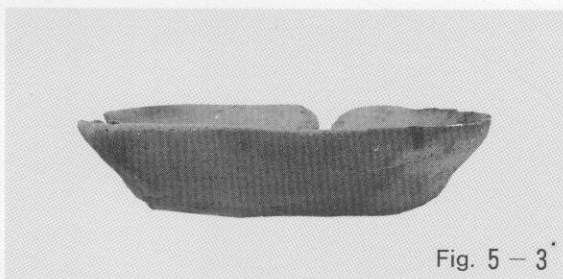


Fig. 5-3



Fig. 5-4



Fig. 5-5

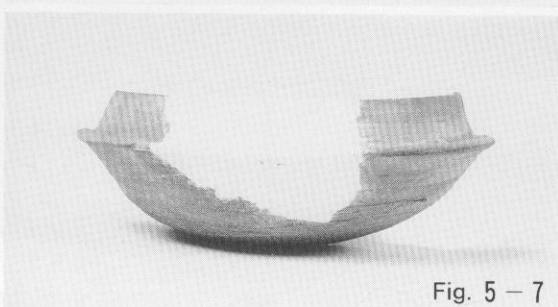


Fig. 5-7

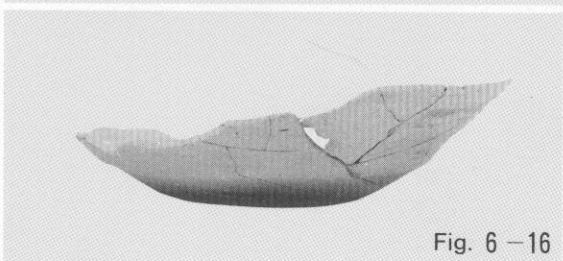


Fig. 6-16

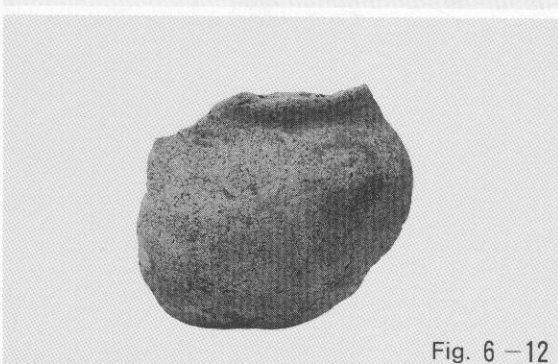


Fig. 6-12

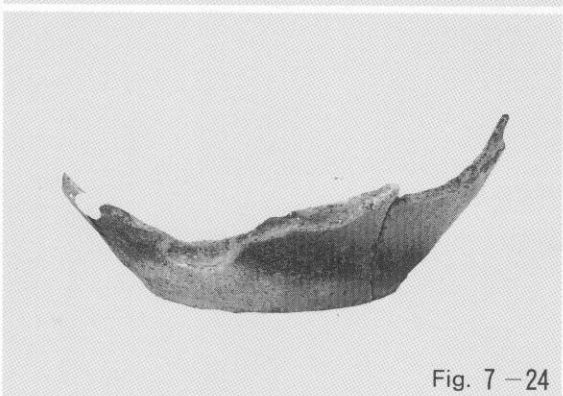


Fig. 7-24

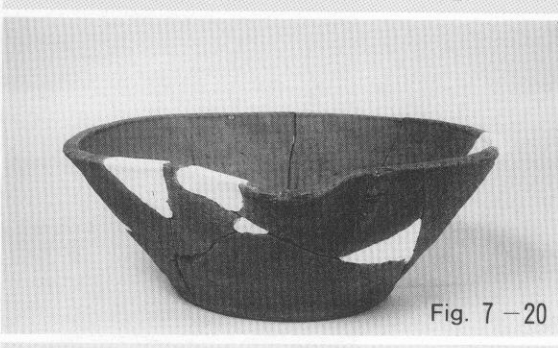


Fig. 7-20

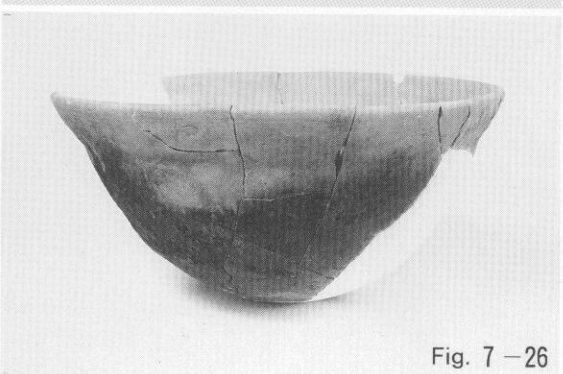


Fig. 7-26

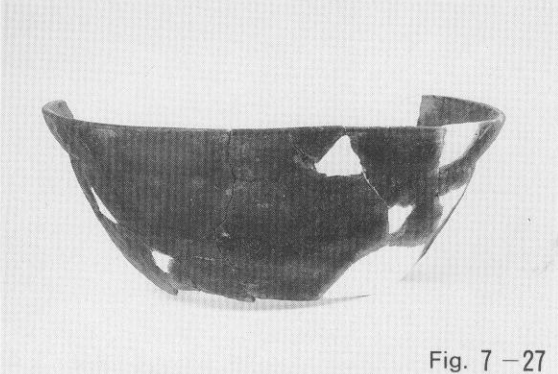


Fig. 7-27

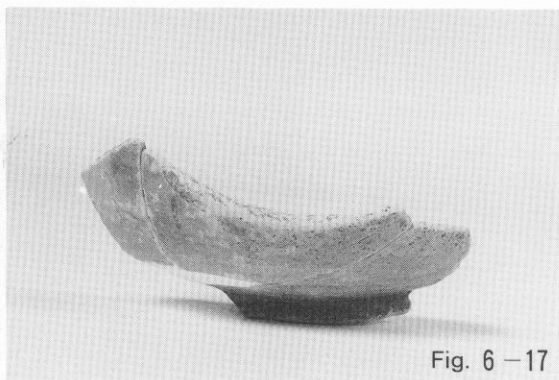


Fig. 6-17

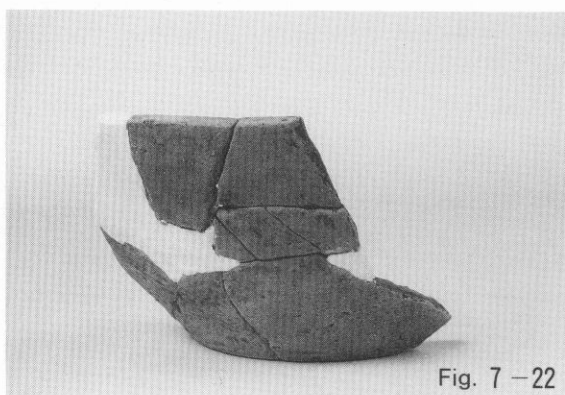


Fig. 7-22

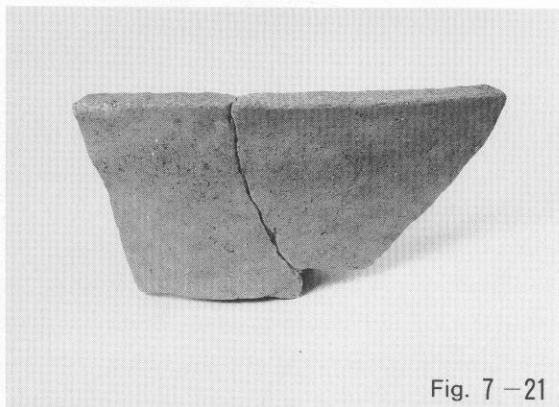


Fig. 7-21

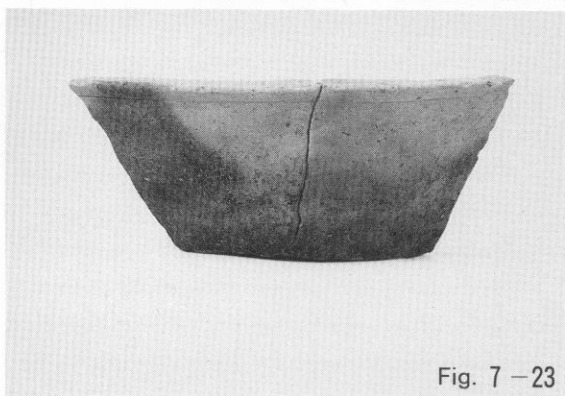


Fig. 7-23

PL. 7 SD-2 出土土器

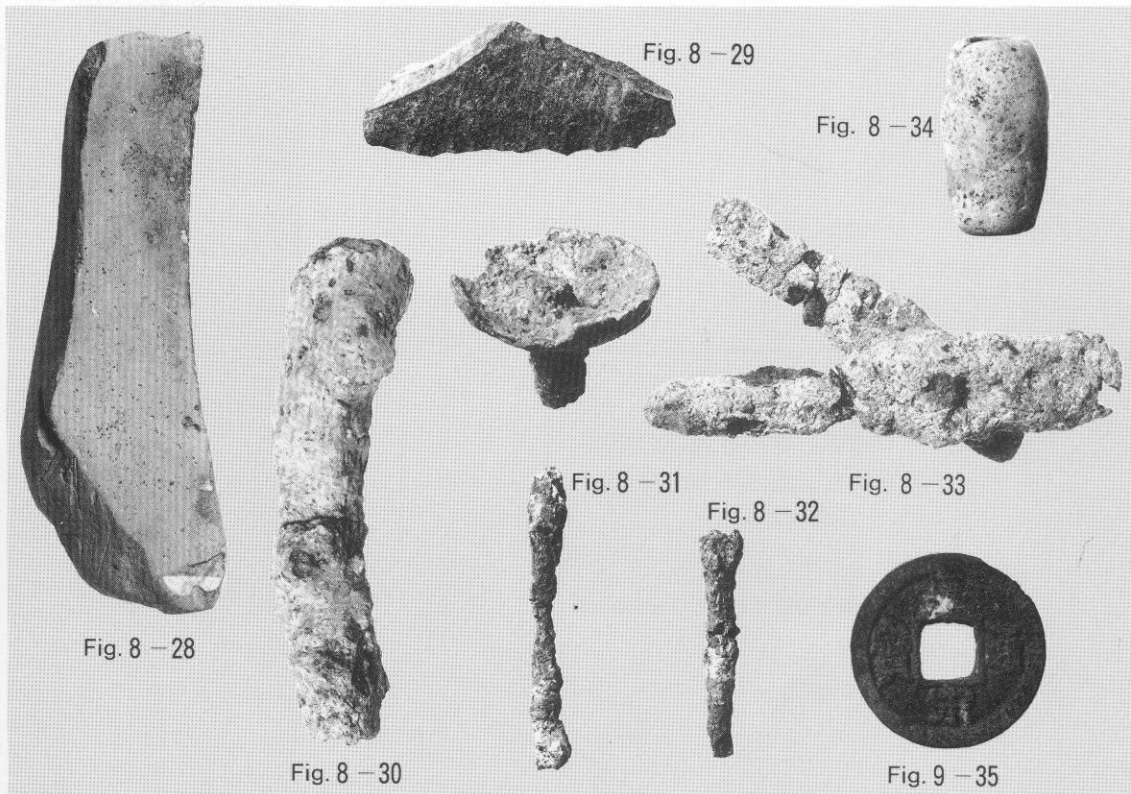


Fig. 8-28

Fig. 8-29

Fig. 8-34

Fig. 8-31

Fig. 8-32

Fig. 8-33

Fig. 8-30

Fig. 9-35

PL. 8 出土鉄器・石器・土製品・銅銭